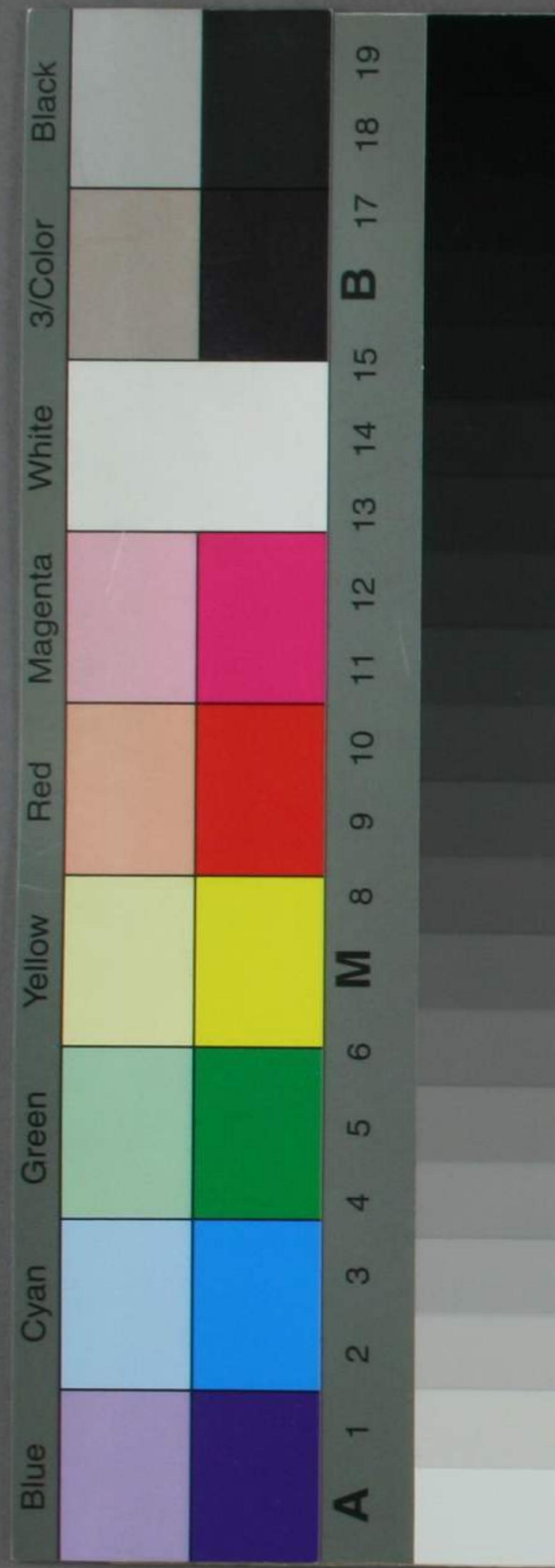


• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 JAPAN



## 三七 全傳南柯夢卷之七

東都 曲亭馬琴編次

## 長町の五味下

あ泣く嘆息し。痛記哉。此ひどい子を失ひ。又今この哀別離苦。ひやとすむ  
あひゆる。お嬢さを慰める。陪從の童と進らむべ。とりひかけて縁類小立出。  
外面をまく招ば豫立てろや。ぬくろけん。入の奴隸。轎の内を御すふり定て。  
久抱だまる稚兒を。三傍へ遙よみて。且不審も。且教び忙しく走りゆく。  
嘯むを。喜や思うるにか。とあらぞ。莞尔とうら笑て。抱たれ。小涌。やよ  
母。これ見え。ちよな叔さま阿婆さま。この赤い衣。こも四つ。縫刺て俄凜よ  
被せ。かる木偶さま。と。弄賣間よ。番浪。へ。舊の。よ。ゆ。ま。ま。ま。  
三傍よ對ひ。憂を慰る。と。すくの陪從。と。お。の。童よ。ま。の。あ。じ。室よ

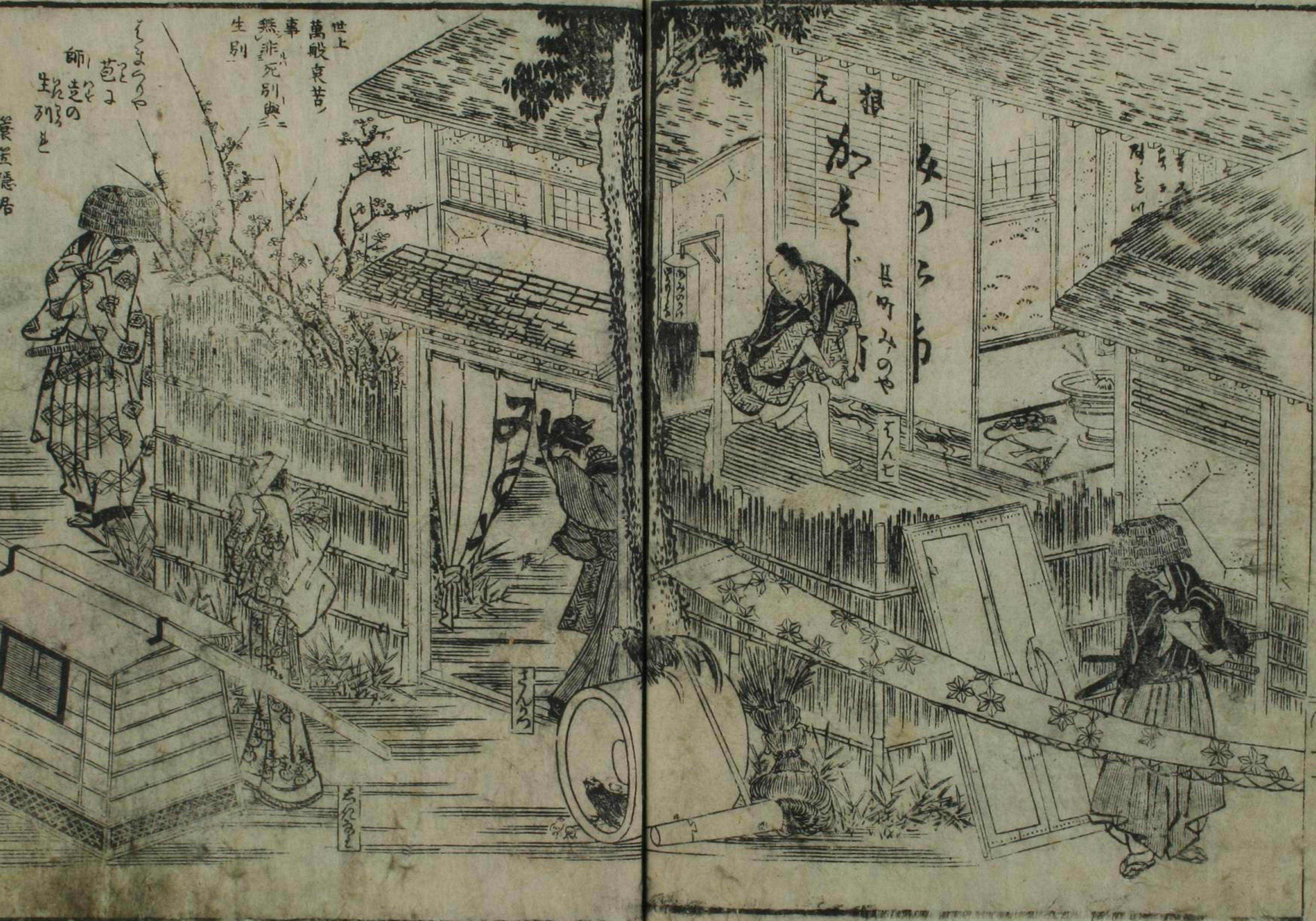
みの食つまき。と曾をかへ。まのふうての長町を能徊。潛す  
本七が今くる体と窺う。いひあるもとがをゆき。仰きは是を方。  
まよへ旅宿の徒姫あさす。サヌキに起くわ。相合川のやうるを。鬪争  
起く。ちあふを刀の光す。これをそれば。本七と全八う。二揚と椎江  
女鬼。周章する。痛しく。潜すもきをそれ抱た。河奈侍ひよ走り退く。  
そくも媒九郎が手瘡を肩く。脱とあると出あひう。矢庵すこれを  
旅宿とし。まよひ慰めうとぞ。あるすよがきもさなよをまよが旅宿と到  
着して。緑由と便。遙す橋より來して。ねてありなこれやこの椎江を。その父と  
撲。四子が憂苦を慰る。ひざうりの被りの納き。ひざうり。静く侍る。とて  
番よ復示せば。と拂つとて。抱きくるもきを。お演がようす押す。あん

好意の喜く。仰きど。されりとも隻親と離れて。みの尊命大和へ伴へ。かく  
孫とも。そそり。かくぶ。貪て。母が艱育み。きて久後なり。かん經夫も  
まよ。一見。いきらびのまき。まよふう。提正の。もり。の絶え。妹背の契。互代の護身囊と。この爐の中へ投入。願ふ  
復モ産靈の庭燎ともえ。と誓ひ。と。自かある。項よ掛す。護身囊  
の細く。外ヤ。と。巻す三味線の撥の片割。ス。お浪。これを。とく。と  
怪。よ。筋。と。押。と。不。番。や。この撥の片割へ。と。お。従来。認。め。の。あ。あ。て。う  
所持。も。か。り。そ。き。の。乳。名。を。か。き。と。く。が。う。護身囊。よ。懇。の。胸。帶。の  
あり。や。る。よ。し。と。い。と。せ。の。三。勝。へ。と。え。か。う。と。こ。宣。六。先。き。と。名。の。當。る。像。元  
の。二。種。よ。う。が。乳。名。か。う。と。せ。れ。丹。波。弓。郎。と。ひ。つ。人。の。女。心。と。情。く。そ。そ  
か。え。か。の。年。来。神。す。祈。願。を。う。け。竭。と。お。慕。ひ。ま。い。母。心。す。お。ま。ま。う。う。人  
ま。ま。か。の。母。う。と。く。く。り。と。携。る。ま。す。か。通。の。中。引。寄。と。果。

候の川の字子親子三人が袖の雨浦懶とうる歎をうり且てニ勝ハ胸前  
を摺下し。二十の年よりありて面紙へ忍らむどく名告り附機と割  
ふと答との述言。ひままで存命をひるが。まことかびうら。といたに説  
べ。安徳はいと面見に風情す。あくねうとそ外づきく。ひつみの悔  
まことあが一宿を押放る様よりとく出と機の片割をひろよ合。お  
やめり。とぞ。前夫の徳への便りをまよ。二十のとき乳房と放し夫婦  
を離れて。おもむく洛へよう。あつて後り夫や子の往方行國とあらざつた  
倦ぬ別れ。おもむく洛へよう。あつて後り夫や子の往方行國とあらざつた  
そら簞くらまな人の数ふえ入アカヒー。そら行比そと同母も間。女  
児もありうと。猶かうぐて頃、もも姫。そればとよふ父へ盲目と  
うりく髪を剃りこさりけり琵琶法師。名リ丹波都と更めて伊勢ふ  
四年の僑居其如よと住み。身の在処を訪んとて。そらをねく音途

3。もとぐづづく。是るん元出のアラと路。山腹の斧より。非命  
よ世を去ぬひたる。首尾の箇様こと。半六が。病篠。奈良と洛の  
一五一下を。物語れば安徳は。おふ小差る身の幸徳。綾や綿ふ。裝たて  
ち。くろの縊襦へ。寢くらむ。そくよの達。おかりて。鈍くわ缺だる帰の道  
夫。お列立つ。その事よ。達へようやれど。給ひせんと。おもむ  
る。カケ。おとと。おきうる。おとと。おきうる。おとと。おきうる。  
続井家の老尼。機松典。信とつぶ人の内室。世を早じ。跡よ送わづ稚児よ。  
乳齿を索ると。おほ乳汁の個。おとと。おとと。おとと。おとと。  
おとと。おとと。おとと。おとと。おとと。おとと。おとと。おとと。  
あれど。おとと。おとと。おとと。おとと。おとと。おとと。おとと。  
とおとと。おとと。おとと。おとと。おとと。おとと。おとと。

有身にて死モ一子ハ妻のへきる園花あり。さればよ世の人に馬士  
船長とあらざらくか氣の人も猛ニ老後の後妻よりあられ。安らぎに  
年月を送リよつてても忘れざれどもその事。ひのえみに二味猿の扱  
あさび合ひる。稚たうりふが女廻を育さんる恩ある人平ニよぶとす  
小一言の礼謝られぬ恩恩縁姉の夫を妹よ射せんとも羞ふ。  
蓬花母がうろよ似とぞ。園花ふわ操を破る。またがゆをおひ続くと  
やあくちやめてか。羨うざればせんとぞ。又門室とこと裏へ来て。道  
隠めうとそりに現だほ烈女の中を厘かりがれい淫肉。愛よ觸れて  
又愛れ。失ふ因果へ忽む。親子ニもどらのひとと。天道の傳へ割符  
を合と四罰と撥面目あやと身を投卧。声を憤じ。泣母の脊折捺る  
三ツ。口を理ともひひうね。名告あべ園花じめ。妹まれうち異父  
兄弟義理あらうよ夫を配偶し。それを菩提の種すて。ほ世の外の山こ  
うくすく安く作りあん。まくらひ神して。まくま歎にみひと  
練めらうら豆改女貞とあらふオセと。まく縁ば離さねば。今夫と  
す六とのよ母ふらぐやうり馴合く。逃れ奔らへたすあんと。疑ふ  
ともうひとたぐ。うすやうくらへら来る。孝と貞と人ある。傍に  
お聞ふ歎たをまく。まし又うらう。憂文をうらの様智惠が。仇  
とあらねる。悔一きよでめてかきをおて帰。娘音ハ丹波忍とのとみだ  
の罪滅。園花がみよハ姪。まみた後も疎み。うら。けみそをまくね祖  
母と叔母よ娘音うらの子のまよ。まよもあふ。心のびくよ。遠く  
来をまく。まえをして偕共と。庚くら房をまよを。まく実  
の孫ともううがしが。え愛く一きよ鮮まれ。化の子のうらへます。



恩が下くねて来つ。鬼婆くとよらひゆひと。又が身ひそあとの実の祖母  
さよまへ大和へ伴ひゆ。欲とりよめん行ふされ。ゆきとばにぞ詠びた  
ま。鳴平胸苦一と立のび。孫を引くよむらうまく。ひい隠されて稚  
児へ又本偶を貰ふとまん。母れよむらひ養ふと。迎よ来へとた  
まわれ。うりきよに言の夢の家の家へ被よみたあま。目送う見えつる聲と  
すが。果敢あん列れを告く。猪行を常の鐘の声。のみ入相へにす  
うも。ころ細きどらす。やくあ狼の三傍子列を告く。外面へ立せと。か  
鯉を家うち齋の内みわまと陸声を。ぎれすて三傍へ。園花みあ  
らねどそふりのうきく。ゆとく。圓は奴隸とも。くや檻を禡ふ。  
まし後れく。あ狼へ。小首傾け。泣教をえ。と後よ引体だ。お  
もあれ編室深く。あくる武士二人。右手左手。ひづられて前うり生垣の薙  
よ竊穴。目今。翁浪がゆとえて。或へ歎息し。或ひひくうら島だ。まら  
いらげて。えうれつ。往るもあれど。あくよ。三傍それよみとらぶと。高連小  
彼方を目送れ。次女懶よ。そく背て。師走七日のびふくらども。おかを列の  
母親の後。新ひよ。子の與ち。えつら。られを。うだうと。とへ。胸も板庇を漏  
ヌ月を。あひよ。ゆく。び裡へ。佐よ。庵福の障子を。とと。屏くを。誰そと  
アハハ。まじ。そのとんす。七の三傍。よ。財く。ひゆ。これ。禦よ。背く。うゆ  
入て。五一千を。審。よ。ゆ。り。み。是過世の讐敵。今親子と。う。同胞。う。り。  
夫婦と。う。う。う。の類。惱を。う。う。う。父の蟄居を。許。う。め。り。ひ。幸意を  
もと。えを。捨て。男。よ。侮。眉。豈。所。容。く。と。南都。へ。ゆ。う。ん。や。加之相合禍  
みと。全へを。殺。や。る。夜行翁が。狩。よ。う。と。市。の。正。う。け。む。を。向  
ら。と。風。声。と。う。う。と。う。ど。も。櫟。九。年。を。と。脱。一。られ。ば。這。奴。あ。を

「わが身は嘆ね需ぬ先とあるとも厭へ。夫婦がとも厭ふことあるべし。今こそ  
は身をりづぶるようから。志を改めとべし。只物の向むきては元  
もしく。卒ニどゆ誠ひを。此よもろの三面同きたと身を恨みを理み  
し。二務ひくらほぞ。有身の親類、親と親の夥もろすが。行れ  
をひづれとひれがれん。身を仇する身の終やあく一筆送さんと。うけ  
覗の蓋えぐい。黒々の曲とど直する管の筆をひとと覗よ侵し。  
出戻の薄あかくどう。

て人を救ひ一木七を搦捕らんかよ向ひたり。縛憂うとひをうなぐ。  
跳うちを引被だ。雄よ雌よ横地と投きを。並踰う又組者をぬり  
拂ひどり打倒し。もくもくと投退し。秀ゆくともすと妻女のまを  
うきうきする。月より暗に諸戸戸ふ門近くゆく未ろ。年ニ直とやさ  
らびひえくりて。そんニ猪祭皆どおゆくめくゼヤと間隙む荒男の  
兵士ホガ薦塗よ。木七をもじと追薦出。先よすじを卒ニ足が死  
一木と蹴倒し。続て懸きをともく引布。くきよりどよ。とやのよ  
うれ。無もすと掌を合へ。あはくつ妹と夫が又よをとて死  
みゆく。今宵一夜成千日の墓すたりの命あり。

## 千日寺の極

まもすセニ勝レ往未絶るを行はどよ。彼此よて宿を添へ候の雨共

さて行ひこそ夕れ夜の傘もに入前をもの。骨ハ雄すちづくと。竹田  
伏えも外見アく。民後髪かけそいの町を雄ひよ吸畠道田海よ星の新水る。身ハ  
捨果くさむたのと。ぶりど寒々北風よ。追ねく西をあむる。師支七日を  
亡日と。うのふとぞのくと。跡よ残せ。稚児の父よ母よと。啼きまば春のな  
う。浪花津の梅が笠翁と蓑虫の親のふへ鬼きを。黄金も玉も何う見え  
よ。宝うむのを。それと今ハとひ絶く。喜怒哀樂もまみ愛の浮世まれ  
こも。醒ぬ。間酒煮賣。夜商人がふ為う。ねど寒、念佛の証の音うへと  
く。耳のうなる霜の声。常迅速束の間よ。千日墓よ。よそ。時々永禄  
某の年冬十二月七日こかくて木七三拂ハ立す。ぐる印塔の間う。枯柳の  
下。木七をたまう。よ覚放を究め。大婦物語。もあく。三拂。十遍をかく  
唱る念佛の声を公のくよ。また木七。圓。異く。腰の刀を抜いてせば。墳の後ユス

按。源平長  
町すに。塗上  
竹園。伏水を  
ち。ニハ。は  
伏水。山。像。  
地。す。山。像。  
見ゆ。山。像。  
地。す。山。像。  
見ゆ。山。像。



馬鹿の馬鹿を  
てまつせら  
むち

二人苦痛の称名今般と云ふ。夫婦ハ死を嘆く大よ怪しき。然るゝとスコト  
多く。自殺する人やの。其後もとて本せが。ゆくび及び揚立。女よゑ不一  
均す。故に死をやつ。厚倉二郎太夫友春ハ戦松曾太郎ともよ。蝶九郎よ  
索きうて。それを可々ホユリ。毒ガ妙よまつた。跡は続々至三へ互通と登眞  
ひ。妻元を扶被。喘く追蕙。亦よみくそ一牛を挑灯の火光よ照らす。墳の  
後。又ひゆうけごと。妻娘とま六も。間五七尺を隔て。自害。半セホと見て忽  
ちよ締切。人見る景迹を見よ。又驚。夫婦兄弟幼な五通も共  
みくと位式ハ悲も或ハ呆也。そのよりこそ。慌忙て走りあ。抱だ起く  
さきぐふ勦とどめ。今ハイヤ板ふべのとべ。見えどバ傷るる石塔。又一枚の迷虫  
を貰ふをう。そのとて二郎太夫をも對す。またホよひゆ。各の哀傷。りと  
理あれど。づくろひ送書の記をえよ。赤根また昔榮利を謀じ。本精の  
崇を骨とほざ。遂ニ米谷ある。斧楠櫛を伐りし。忽化恨く丹波都を  
叙。更ニ約。そむき。三猪を失ひ。戦松氏と婚縁を締く。是れ  
御の孽アリ。トハ暁アリ。近曾。オセ。三猪をねく長町。又活業。と傳へ。安  
い。憤。堪。その虚実をあん爲。時夕。偕。五條の家を潜び。出雑  
よ。義浪と三猪と。親子の哀告。始終を竊笑して。そぞぞ夫婦の忠孝  
云烈をあつく。識。愧。後悔。とよまつて自殺するの。頃く。三條行原。ふく  
云。の悪棍を殺す。又昼夜相合。檣。全八を殺せり。又。ま六くと市の正へ訴  
恩人。笠松平三。と。が子。ま。と。を。板ひ。り。と。あ。又。妻娘の送書。み。二人の女兒。か  
云。操の比。す。ふく。一。且。三猪が死を究。方氣きを。猪。ア。ふ。お。れ。よ。え。立。て。自  
害。と。が。ハ。ア。が。子。共。ホ。心。死。を。じ。ひ。う。と。う。厚。食。ぬ。ア。夫。を。練。す。彼の身。の。ま。う。を。た  
よ。計。ひ。ま。じ。く。も。孫。の。通。が。み。不。便。う。興。振。ど。年。才。の。恩。を。ま。こ。ま。う。と。耻。づ。



西漢書卷二





えりとつるみ。三木精の崇きを。後家七郎太夫。うりせだ。又子安兵と  
あく。今日の飲食會を。ひそむ。とあくが。かづ。と頻。は慚愧。俄。ひ彼茶亭を  
こねら。を。せつせ。毀。を。節儉。を。みこと。せ。ぐ。上下安堵の。おひ。とすつ。ら。ふ至く。ま。七。落。あく。  
吉種丸。よ苦辣。ち。と。却。全八蝶。か。昂。ホ。よ謠言。せ。く。ス。ト。く。表辺。を。達。す。け  
ら。と。く。と。も。き。角。君。の。恨。を。せ。ふ。る。せ。と。く。病。か。く。五條。小退保難  
と。この。ひ。掠。後。終。三。務。平。三。ホ。や。の。実。を。告。び。と。く。ス。ト。く。表辺。を。達。す。け  
や。ゆ。え。ら。の。一。條。あ。く。そ。の。忠。ひ。ち。ひ。や。く。と。く。時。の。人。稱。贊。せ。ぐ。る。わ。な。され。れ  
ひ。さ。う。と。く。通。を。養。ひ。後。れ。み。堀。を。振。く。家。を。嗣。い。ま。セ。ス。ト。く。駄。を。儲。く。  
セ。ス。続。井。家。み。住。む。と。そ。馬琴。按。ど。よ。本草綱目。卷。三。四。木類下。よ。捕樟  
を。並。出。ま。と。く。じ。の。別。種。す。リ。弓。邦。か。捕樟。く。の。ふ。く。と。訓。そ。と。れ。を。一。種。と  
さ。る。が。ご。一。ス。按。ち。よ。搜神記。よ。吳。の。時。敬叔。大。樟。樹。を。伐。る。み。血。ぬ。く。物。め。  
入。の。面。狗。身。う。り。敬叔。が。り。られ。を。彭侯。と。名。つ。と。乃。烹。く。られ。を。食。ひ。味。狗  
の。如。と。り。く。是。則。樟。樹。よ。木。精。ゆ。一。燈。と。そ。べ。捕。も。樟。も。究。く。大。木。多。  
俳。諧。師。其。角。が。捕。の。天。井。よ。額。さ。る。發。句。あ。り。他。ね。て。く。

## 八畳の捕の板間を漏ろおぐれ

え。ち。又。家。七。三。務。ゲ。る。世。め。か。ま。ぐ。ふ。り。ふ。や。う。或。へ。り。入。笠。屋。三。務。へ。足。利。家。の。時。の  
と。へ。き。み。女。役。う。う。又。千。日。き。み。く。情。死。せ。一。三。務。へ。遙。よ。後。の。る。み。く。美。濃。を。行。い。が。女  
見。ふ。う。と。ほ。き。て。る。淫。婦。う。う。今。う。匂。か。き。え。ま。せ。が。送。書。と。り。り。の。あ。り。好。み。の  
の。往。く。は。写。と。も。り。と。よ。戻。が。活。説。す。続。井。家。臣。赤。根。ま。せ。と。大。和。立。條。の。商  
と。人。ま。セ。ガ。り。と。く。似。く。う。ふ。れ。ど。の。時。代。相。拒。と。遙。く。同。名。異。人。ま。と  
ち。う。べ。一。玄。峰。集。を。按。ど。よ。俳。諧。師。嵐。雪。あ。る。年。の。秋。浪。速。み。お。び。く。  
み。の。食。茜。が。愛。の。ひ。正。訪。ふ。よ。嵐。雪。月。照。と。石。の。塔。婆。エ。駒。入。く。う。ある。手。を

うすとねどぞひをうすアケモバ。

夢ふく 仙まむ 夢うめ 墓まつ

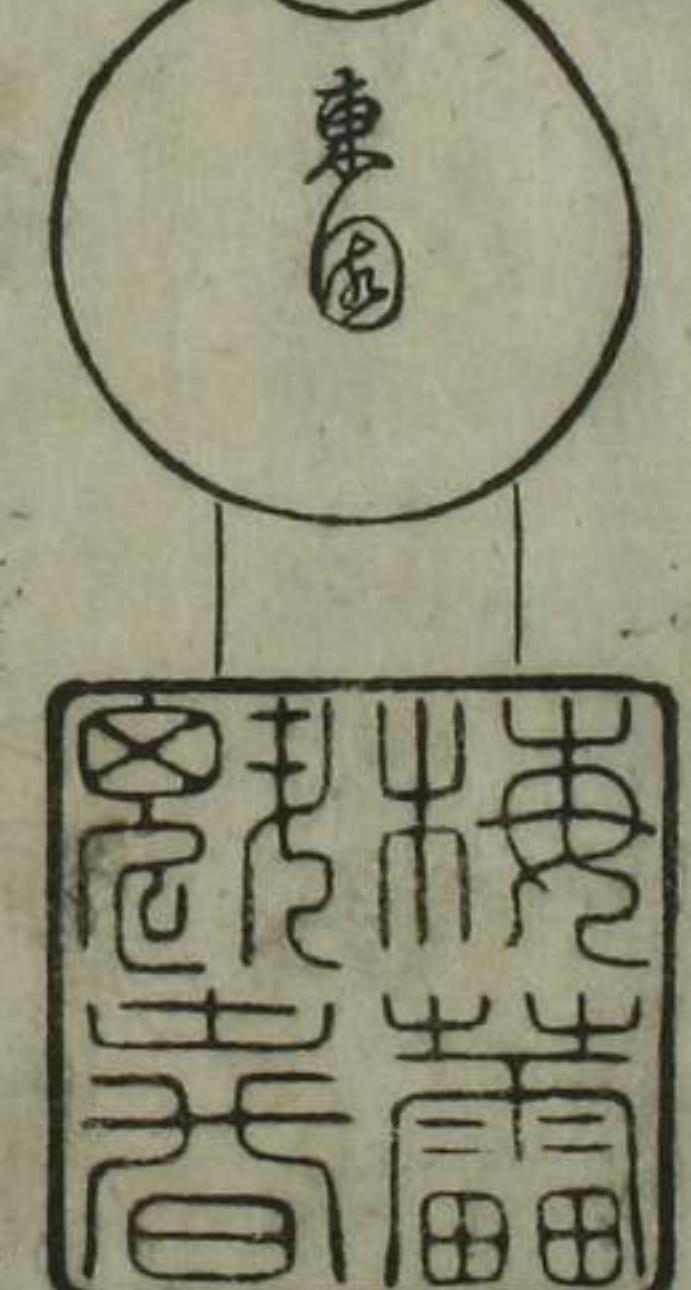
と口號ころごくえ。惜くへやのふと いままよせんト  
りへきを起さセ。今法号寺 難波新セア王俗  
の字七事えが古墳とりふりの金毘羅堂のとう。向く左側より六字  
の名号のを胸著ス。被あはれを。傀儡棚の戯曲ス。假りたる。尼が  
眼を過るふぞぐ四卒ア。被本が送書當初入口は膾免セ。又や  
眼竹とりよりのよ三務本セが紀念ア。を置本の曲子ア。また益々  
辨されどほこの槩略をひく。

▲作者馬琴との書を稿ドをりの夕燈を掲案を拝。もう  
葉じく云む。信濃前司朽長入道の辛家物語ハ原稿せんと  
ア他りとよべ。ほの入へくもえざれば只尋常の軍記とのも案

や。今ふ南柯夢ハ讀せんとく。假りられど閑者そぞ戯曲りに  
ちを笑ふもあらず。才の長短と物の巧拙ハ且くしきど。尔為不  
がぞ。まきりうち。おれりうち。う。そぞ  
雅俗ア。又流行ア。夫流行ハ人よある故我ヌア故アんじま  
これをあらど。差夫。

客有問於予曰。曲亭先生何號號之曲亭。  
予應之曰。漢書陳湯傳云。樂巴陵曲亭。陽  
是矣。亦向馬琴何也。曰。取十刹鈔野。古公  
白。寸非馬卿彈琴。未就身黑鳳史吹葉猶  
壯。以爲我號也。先生嘗墨慕司馬文正。守  
是以名解。字頓吉解蟹也。郭璞江賦云。頓  
結腹蟹水母目鱉。其象有名於鮮也。王吉之  
所夢。亦是長安故事也。冥欣然而喜。因善  
哉。典君一夜詰勝。十年學。冥思向常。以  
為馬琴。真字絕矣。考據而今向諸子。則窮  
然得其淵源。顧昔者司馬長叔。慕蘭相如。  
乃人後名。相如今也。曲亭子。慕司馬文正。  
守而名解。稱馬琴。足以裁。般和諧。今昔異  
其趣。宜同年而後之。先生聞之。喟然曰。二子  
盍知被玉與石。而於暨于否也。盖夫似而  
非之者。齊魯。西參。守我焉。二子深羞之。渡

莫言客唯<sub>レ</sub>而退<sub>シ</sub>予時方東<sub>ニ</sub>師余校<sub>ス</sub>南柯  
夢若干少<sub>ヲ</sub>因<sub>テ</sub>患<sub>ニ</sub>次<sub>ニ</sub>是<sub>ヲ</sub>詣<sub>ス</sub>於<sub>ニ</sub>幕<sub>ノ</sub>後<sub>ア</sub>  
文化四年乙卯九十月月中院夕子東園魁  
蓄子書<sub>ス</sub>於<sub>ニ</sub>東都<sub>ニ</sub>簾<sub>ヲ</sub>簾<sub>ス</sub>軒<sub>ヲ</sub>時<sub>ニ</sub>雨<sub>ヲ</sub>窗<sub>ヲ</sub>



心志 曲亭の聲

割 副 高 橋 待 人



|                        |                                 |
|------------------------|---------------------------------|
| 俊寬僧都嶋物語                | 全六冊                             |
| 桂華絃波新語                 | 全五冊                             |
| 梅川忠 <sub>ニ</sub> 衛大和紀行 | 卷 <sub>ノ</sub> 宗 <sub>ノ</sub> 元 |

右曲亭先生近日著編、題目以今所聞錄十之三、六門人琴驥

